

「自由のしるし」

福岡市立青葉中学校

船木 光

僕の家では、毎年クリスマスを過ぎる頃から家族の会話の中に、「確定申告」という言葉が登場する。年が明けてからは、この言葉はテレビ画面や日常会話で頻繁に飛び交う。「確定申告」とは何だろう。両親はそれで税の還付を受けるそだ。一方、事業をしている兄はそれで税を納めるという。税について無知な僕には不思議だった。

長年の疑問を母にぶつけると、納税額は生活に必要な経費を除いた収入で計算されること、国民から集められた税金は国民の生活のために使われていることなどがわかった。

兄は毎年その頃「もっと税金をいっぱい払えるように今年も頑張ろう。」と口癖のように言う。真意がわからず、母に尋ねたことがある。母の答えは、「お兄ちゃんは、小さい頃から人の役に立つ人間になりたいと言っていたから。」だった。確かに、こっそり兄の卒業文集などを見るとそんなことが書いてあった。

僕は、もう少し税のことを調べることにした。その過程で、僕は興味深い人物を知った。「経済学の父」と呼ばれるアダム・スミスである。彼は三百年程前に生きたイギリスの経済学者で、哲学者でもある。代表的な著書、「国富論」は、古典ではあるが経済の基礎だと言う。もちろん、この書物には現代に通じる税の基本となる考え方が書いてあるのだが、僕の興味を引いたのは、彼が残したと書かれている、「税は、それを納める人にとっては自由のしるしなのである」という名言である。これには、奴婢や奴隷ではなく、という意味が込められているらしい。

税金と言えば、選挙運動期間中、選挙カーから聞こえる言葉から推察するに、快いものではないというのが僕の印象だった。自由のしるしとは意外だ。

「税は、それを納める人にとっては、自由のしるしなのである」僕は、この言葉の意味を調べるために、アダム・スミスが生きていた時代のイギリスの歴史を調べた。そして、産業革命で税の根本が変わったことがわかった。産業革命以前の税は、古代日本で言えば租庸調に代表されるように、紙や権力者への貢物の要素が強かったのだろう。しかし、産業革命が社会の仕組みを変え、市民が自ら、彼らの代表を選ぶことができるようになった。誰もが自由で幸福な生活を送れる社会を願い、理想の社会を実現するための財源を、市民自ら代表者に税として託すようになったのだと考えれば、「税は、それを納める人にとっては、自由のしるしなのである」の意味がしっかりと馴染んでくる。

「もっと税金が払えるようにがんばろう。」と、毎年つぶやく兄の気持ちがやっとわかったような気がする。僕の年頃には、「人の役に立つ人間になりたい。」と語り、日夜頑張っている兄を僕は尊敬する。僕も兄の歳になったら、真面目にしっかりと働き、立派な納税者として社会に役立つ人間になろうと思う。